

発掘調査の概要

古宮遺跡の調査（飛鳥藤原第152 - 8次）

古宮土壇周辺は、推古天皇のおわりだのみや小墾田宮と推定されていた場所のひとつで、1970年、1973年に発掘調査をおこなっています。その結果、古宮土壇は平安時代のもので、小墾田宮とは直接関わりのないことがわかりました。ただ、7世紀前半代の石組池・石組溝や掘立柱建物がみつき、周辺は7世紀代から活発に土地利用されていたようです。

今回は、古宮土壇の南西を調査しました。調査地のすぐ南に県道桜井樺原線がとおり、ここが古代の官道である山田道をほぼ踏襲すると推定されています。飛鳥川の西岸では山田道に関する遺構は確認されておらず、位置や規模、造営時期についてはこれまではっきりしていませんでした。

調査の結果、3条の東西溝を検出しました。調査区の南を南東から北西に横切る素掘溝は、1973年の調査で見つかった7世紀前半代の溝と一連になる可能性が高く、また溝の南側が整地されていることから、この溝が7世紀代の道路の北側溝であったようです。その後、奈良時代～平安時代前半に再度整地して7世紀の溝を埋め、素掘溝がつくられます。3つめの東西溝も、この整地の後に、先につくられた2条の東西溝の北側に設けられた素掘溝です。

調査区周辺には『日本霊異記』に「豊浦寺の前の路」として山田道があらわれます。今回みつかった溝が山田道か、それに先行する道路側溝の可能性が高くなりました。飛鳥川の西岸でもついに古代の山田道が姿をあらわしてきたのです。

（都城発掘調査部 木村 理恵）



調査区全景（北から）